



▲校区史を読む住民の姿を想像し、編集会議は熱が入ります



▲校区史用に続々と集まる資料のひとつ(あさり採り/昭和37年)

地域の話題

童浦校区

校区の新たな発展を目指して

校区の課題を解決しよう

「みんなでつくる校区史」に取り組んでいる

童浦校区「コミュニティ協議会から」お便りが届きました。



童浦校区は、先人たちのふるさとへの愛着と努力や思いによって、多くの苦難を乗り越えてきました。時には、臨海地の埋め立てのように、未来の発展への期待と引き換えに代々受け継がれたなりわいを転換する決断をしたこともあります。そのかいあって、現在では盛んなコミュニティ活動に加え、子どもたちを支える地域の事業も充実し、活気にあふれた校区となりました。しかし、こうした変化の中で、校区に新たな課題も出てきました。

- 校区のことを知らない新しい住民が増えた。
- 世代交代が進み、校区の歩みを知らない世代が増えた。
- 新旧住民の混在により、連携が図りにくくなった。

これらを解決し、「将来を担う子どもが、自分たちが築き上げた校区に

誇りが持てるようにしたい」「市の発展を童浦校区が支えたという校区の熱い思いを次世代につなげたい」という思いから、劇的な変化を遂げた昭和30年以降を中心とした校区史を作ろうという構想が持ち上がりました。

自分たちの言葉で伝える校区史を

平成26年度から校区会長をはじめ、4人の編集委員が中心となり、市のまちづくりアドバイザーの助言のもと編集をはじめました。校区の皆さんや関係者のご協力によって集められた写真を中心に「見てわかり」「わかりやすい言葉で伝える」校区史を目指しています。月2回ほどの編集会議では、来年度の発刊を目指し、編集にも熱が入ります。

この校区史を見てくれる未来を担う子どもと、区の仲間となる新しい



世帯に、校区に愛着と誇りを持つてもらい、喜んでもらえることが、編集委員全員の意欲となっています。

歴史は昔を懐かしむためのものではありません。私たちの足元を見つめ直し、新たな校区としての前進、発展を目指すための礎としてほしいのです。そして校区の発展を目指して、校区一丸となって取り組んでいきます。

●片浜海水浴場のにぎわい(昭和30年代末ごろ)

